

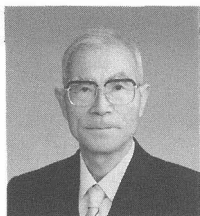
せいかつか

SEIKATSUKA EDUCATION

第 4 号
1997

着眼対局 着手小局

宮 本 三 郎



筆者は昭和22年1月教職に就き、新教育と共に歩み、その盛衰をじかに見てきました。それだけに生活科の動向については殊更関心を持ち、学習指導要領等の作成や教育課程講習会などに携わりながら、定着には少なくとも10年のはかかると予想していました。

今年はその丁度半ばになりますが、二つの理由でほぼ順調に定着しつつあると考えます。

理由の第1は、戦後の新教育の挫折との対比です。当時、経験学習やコア・カリキュラム運動は、実験学校や先進校を先頭に一時は隆盛を誇るかのように見えてましたが、長続きせず、結局10年後の学習指導要領の改訂時に系統学習に取って替わられてしまいました。

これには講和条約締結後の国の行政の転換や、学力低下問題などの外的要因が大きく関わっていたことは否めません。しかし、現場サイドからは、むしろ新教育の理念が教師に十分浸透せず、また、新しい指導法も身に付かなかったという内的要因が決定的だったと思います。要は教育改革が政治改革の一環として急激に行われ、新教育が一方的に与えられたため、その理念も方法も教師一人ひとりに主体化されなかったということに尽きると思います。

こうした視点からとらえると、生活科の設置には20年の歳月をかけて、教育的立場から慎重な研究実践と評価が行われ、かつ現場の実態も十分考慮して漸進的に導入が図られています。したがって、その理念も方法も徐々に教師に浸透し、教師のものになりつつあって、定着の基盤はほぼ固まったと思います。

理由の第2は、生活科の授業の現状です。これについては多言を要しません。多くの学校の中には少々おかしい授業があったり、取り組みの熱意や体制に地域較差があったりしますが、全体として見れば順調に育っていると思います。

一部には、発足当初の推進校のような精力的な教材開発や特色ある活動が見られなくなったという指摘もあります。しかし、それは停滞とかマンネリ化ということではなく、むしろ着実な実践へと移行しつつある過渡期の現象と思います。

今後は、そうした大局に立ってその成長過程をとらえ、温かく見守るとともに、一方、教師の単元構成の力量の育成や、教科としての指導法の確立などの研究実践を積み重ね、定着化への歩み方を一層確かにすることが大切ではないかと思います。

目次

◆着眼大局 着手小局	宮本 三郎	1
------------	-------	---

特集 I 育つ子どもの姿の読みとり

◆生活科教育は、小学校教育を確実に変える	羽豆 成二	4
◆生活科が変えたコト、セレクト10 ^{テン}	寺本 潔	10
◆生活科教育がどこまで学校教育をかえる可能性をもつか	松田 智子	16
◆生活科学習で育ってきた資質や能力	澤田 妙子・炭山 泰江・常木 初野	22
◆子どもの育ちの姿をどう読みとるか	井口 尚之	28
◆子どもの育ちと教師の支援	木内 昇	34

特集 II 新しい単元作りの発想

◆『創造』と『共存の感情』で培われる表現力を育てる	小幡 肇	40
◆積極的なかわりが資質・能力(学力)を高める	町田 利章・中村恵美子	45
◆「総合的な学習」と生活科の課題	村川 雅弘	50
◆学びの社会的編成：フィールドワークにおける相互行為の分析	稲垣 成哲・山口 悦司	55

特集 III 大学における生活科教育の受けとめ方

◆「生活科教育法」の教授内容とねらいについて	藤井 千春	61
◆大学における生活科授業のパラダイム	松本 康	68

自由稿

■間接教育の構造と生活科教育	栗原 昭徳	76
■子どもに働きかけてくる環境構成	中野 啓明	82
■力の差を認め合う子供を育てる	荒井 毅	88
■認識の道具としての五感の成立	無藤 隆・百目木 律子	94

新しい授業の試み

- 総合学習の視点を取り入れた生活科.....喜名朝博 103
- 100年生きる 子どもの環境とこれからの生活科.....小西啓二 106
- 地域にかかわる子供を.....新川小学校第2学年担任 109
- 生活科の理念を生活体験学習に生かす.....猪飼敏貴 113

日本生活科教育学会会則.....	116
学会だより.....	117
機関誌編集委員会投稿及び編集規定.....	119
編集後記.....	120

